

911.56  
14  
2

911.56-H14-2  
1200500756606

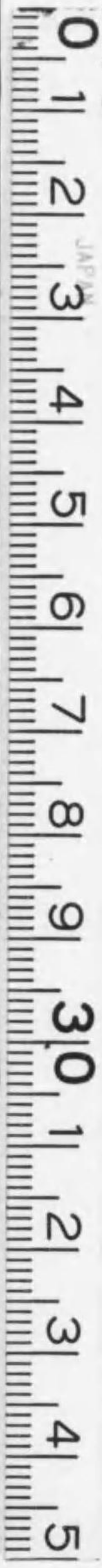
命 宿

萩原朔太郎

X  
複写

昭和24年

創元社發行



始



911.56  
H14-2



萩原朔太郎

宿

命

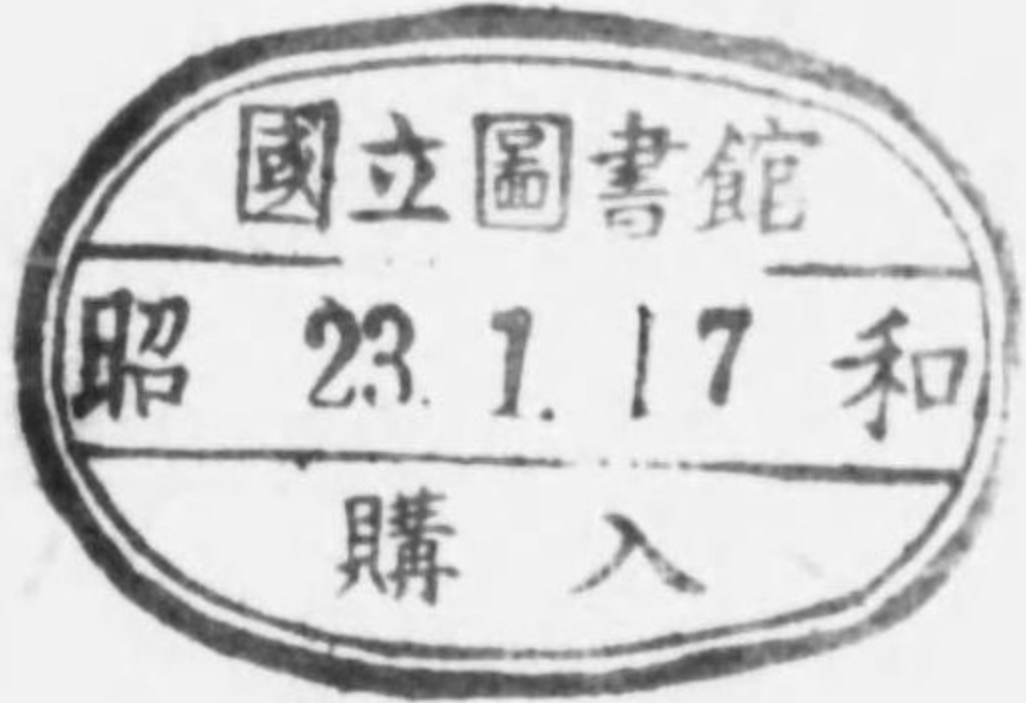
創  
元  
社

目次

散文詩について(序に代へて)

散文詩

●あゝ固い氷を破つて.....	三
●婦人と雨.....	四
●芝生の上で.....	六
●舌のない眞理.....	七
●慈悲.....	八
●秋晴.....	九
●浪と無明.....	一〇



- 陸橋を渡る……………二
- 恐怖への豫感……………三
- 涙ぐましい夕暮……………四
- 地球を跳躍して……………五
- 宿酔の朝に……………六
- 夜汽車の窓で……………九
- 荒寥たる地方での會話……………一〇
- パノラマ館にて……………二二
- 喘ぐ馬を驅る……………二六
- 春のくる時……………二七
- AULD LANG SYNE!*……………二六
- 木偶芝居……………三〇
- 極光地方から……………三三

- 斷橋……………三三
- 運命への忍辱……………三四
- 寂寥の川邊……………三五
- 船室から……………三六
- 田舎の時計……………三七
- 球轉がし……………三九
- 鯉幟を見て……………四〇
- 記憶を捨てる……………四一
- 情緒よ！君は歸らざるか……………四二
- 港の雜貨店で……………四三
- 死なない蛸……………四四
- 鏡……………四五
- 狐……………四六

吹雪の中で.....五  
銃器店の前で.....五  
虚数の虎.....五  
自然の中で.....六  
觸手ある空間.....六  
大佛.....六  
家.....六  
黒い洋傘.....六  
國境にて.....六  
恐ろしき人形芝居.....六  
齒をもてる意志.....六  
墓.....六  
神々の生活.....五

郵便局.....五  
航海の歌.....七  
海.....八  
建築の Nostalgia .....八  
初夏の歌.....八  
女のいちらしさ.....八  
父.....九  
敵.....九  
物質の感情.....九  
物體.....九  
自殺の恐ろしさ.....九  
龍.....七  
時計を見る狂人.....六

群集の中にあて……………100

橋……………105

詩人の死ぬや悲し……………106

主よ。休息をあたへ給へ！……………110

父と子供……………113

戸……………116

山上の祈……………117

戦場での幻想……………118

蟲……………119

虚無の歌……………128

貸家札……………131

この手に限るよ……………135

臥床の中で……………140

抒情詩

物みなは歳日と共に亡び行く……………145

漂泊者の歌……………157

乃木坂俱樂部……………161

珈琲店酔月……………164

晩秋……………166

昨日にまさる戀しさの……………168

歸郷……………170

虚無の鴉……………173

品川沖觀艦式……………174

火……………176

地下鐵道にて……………178

告別……………一八〇  
 遊園地にて……………一八二  
 動物園にて……………一八五  
 中學の校庭……………一八八  
 波宜亭……………一九九  
 小出新道……………一九〇  
 新前橋驛……………一九二  
 大渡橋……………一九四  
 廣瀬川……………一九七  
 利根の松原……………一九九  
 公園の椅子……………二〇〇  
 監獄裏の林……………二〇二  
 我れの持たざるものは一切なり……………二〇四

海鳥……………二〇六  
 まづしき展望……………二〇八  
 波止場の煙……………二一〇  
 蠅の唱歌……………二一一  
 憂鬱なる花見……………二一四  
 月夜……………二一七  
 憂鬱の川邊……………二一八  
 艶めかしい墓場……………二二二  
 くづれる肉體……………二二四  
 鴉毛の婦人……………二二六  
 綠色の笛……………二二八  
 かなしい囚人……………二三〇  
 憂鬱な風景……………二三三

野鼠……………二三四  
 輪廻と轉生……………二二六  
 青空……………二二九  
 さびしい來歴……………二四〇  
 怠惰の曆……………二四二  
 閑雅な食慾……………二四四  
 馬車の中で……………二四六  
 天候と思想……………二四八  
 笛の音のする里へ行かうよ……………二五〇  
 顔……………二五二  
 白い雄鶏……………二五四  
 囀鳥……………二五六  
 厭やらしい建物……………二五八

悪い季節……………二六一  
 桃李の道……………二六四  
 まどろすの歌……………二六七  
 風船乗りの夢……………二七〇  
 佛陀……………二七二  
 荒寥地方……………二七四  
 ある風景の内殻から……………二七七  
 輪廻の樹木……………二八〇  
 曆の亡魂……………二八三  
 沿海地方……………二八六  
 大砲を撃つ……………二八八  
 海豹……………二九一  
 猫の死骸……………二九四



沼澤地方……………二九六

鴉……………二九八

駱駝……………三〇〇

大井町……………三〇二

吉原……………三〇四

大工の弟子……………三〇六

附 録 (散文詩自註)……………三〇九



散文詩について

序に代へて

散文詩とは何だらうか。西洋近代に於けるその文學の創見者は、普通にボードレエルだと言はれてゐるが、彼によれば、一定の韻律方則を無視し、自由の散文形式で書きながら、しかも全體に音樂的節奏が高く、且つ藝術美の香氣が高い文章を、散文詩と言ふことになるのである。そこでこの觀念からすると、今日我が國で普通に自由詩と呼んでゐる文學中での、特に秀

れてやや上乘のもの——不出來のものは純粹の散文で、節奏もなければ藝術美もない——は、西洋詩家の所謂散文詩に該當するわけである。しかし普通に散文詩と呼んでるものは、さうした文學の形態以外に、どこか文學の内容上でも、普通の詩と異なる點があるやうに思はれる。ツルゲネフの散文詩でも、ボードレエルのそれでも、すべて散文詩と呼ばれるものは、一般に他の純正詩（抒情詩など）に比較して、内容上に觀念的、思想的の要素が多く、イマヂスチックであるよりは、むしろエッセイ的、哲學的特色を多量に持つてゐる如く思はれる。そこでこの點の特色から、他の抒情詩等に比較して、散文詩を思想詩、またはエッセイ詩と呼ぶこともできると思ふ。つまり日本の古文學中で、枕草子とか方丈記とか、または徒然草とかいつた類のものが、丁度西洋詩學の散文詩に當るわけなのである。

枕草子や方丈記は、無韻律の散文形式で書いてゐながら、文章それ自身が本質的にポエトリイで、優に節奏の高い律的の調べと、香氣の強い藝術美を具備して居り、しかも内容がエッセイ風で、作者の思想する自然觀や人生觀を獨創的にフィロソヒイしたものであるから、正にツルゲネフやボードレエルの散文詩と、文學の本質に於て一致してゐる。ただ日本では、昔から散文詩といふ言葉がないので、この種の文學を隨筆、もしくは美文といふ名で呼稱して來た。然るに明治以來近時になつて、日本の散文詩とも言ふべき、この種の傳統文學が中絶してしまつた。もちろん隨筆といふ名で呼ばれる文學は、今日も尙文壇の一隅にあるけれども、それは詩文としての節奏や藝術美を失つたもので、散文詩といふ觀念中には、到底所屬でき得ないものである。

自分は詩人としての出發以來、一方で抒情詩を書くかたはら、一方でエッセイ風の思想詩やアフォーリズムを書きつづけて來た。それらの斷章中には、西洋詩家の所謂「散文詩」といふ名稱に、多少よく該當するものがないでもない。よつて此所に「散文詩集」と名づけ、過去に書いたものの中から、種類の者のみを集めて一冊に編纂した。その集篇中の大分の中は、舊刊「新しき欲情」「虚妄の正義」「絶望の逃走」等から選んだけれども、篇尾に納めた若干のものは、比較的最近の作に屬し、單行本としては最初に發表するものである。尙、後半に合編した抒情詩は、「氷島」「青猫」その他の既刊詩集から選出したものである。

昭和十四年八月

著者

## 散文詩

宇宙は意志の表現であり、  
意志の本質は悩みである。

シヨペンハウエル

### ああ固い氷を破つて

ああ固い氷を破つて突進する、一つの寂しい帆船よ。あの高い空にひるがへる、浪々の固體した印象から、その隔離した地方の物佗しい冬の光線から、あはれに煤ぼけて見える小さな黒い獵鯨船よ。孤獨な環境の海に漂泊する船の羅針が、一つの鋭どい意志の尖角が、ああ如何に固い冬の氷を突き破つて爆進することよ。

## 婦人と雨

しとしとと降る雨の中を、かすかに匂つてゐる菜種のやうで、げにやさしくも濃やかな情緒がそこにある。ああ婦人！婦人の側らに座つてゐるとき、私の思惟は濕ほひにぬれ、胸はなまめかしい香水の匂ひにひたる。げに婦人は生活の窓にふる雨のやうなものだ。そこに窓の硝子を距てて雨景をみる。けぶれる柳の情緒ある世界をみる。ああ婦人は空にふる雨の

點々、しめやかな音楽のめろぢいのやうなものだ。我らをしていつも婦人に聴き惚らしめよ。かれらの實體に近よることなく、かれらの床しき匂ひとめろぢいに就いてのみ、いつも蜜のやうな情熱の思慕をなさしめよ。ああこの濕ひのある雨氣の中で、婦人らの濃やかな吐息をかかず。婦人は雨のやうなものだ。

## 芝生の上で

若草の芽が萌えるやうに、この日當りのよい芝生の上では、思想が後から後からと成長してくる。けれどもそれらの思想は、私にまで何の交渉があらうぞ。私はただ青空を眺めて居たい。あの蒼天の夢の中に溶けてしまふやうな、さういふ思想の幻想だけを育ぐみたいのだ。私自身の情緒の影で、なつかしい緑陰の夢をつくるやうな、それらの「情調ある思想」だけを語りたいたのだ。空飛ぶ小鳥よ。

## 舌のない真理

とある幻燈の中で、青白い雪の降りつもつてゐる、しづかなしづかな景色の中で、私は一つの真理をつかんだ。物言ふことのできない、永遠に永遠にうら悲しげな、私は「舌のない真理」を感じた。景色の、幻燈の、雪のつもる影を過ぎ去つて行く、さびしい青猫の像かたちをかぬじた。

## 慈悲

風翠の鎮魂樂をきくやうに、冥想の厚い壁の影で、靜かに湧きあがつてくる黒い感情。情慾の強い惱みを抑へ、果敢ない運命への叛逆や、何といふこともない生活の暗愁や、いらした心の焦燥やを忘れさせ、安らかな安らかな寢臺の上で、靈魂の深みある眠りをさそふやうな、一つの力ある靜かな感情。それは生活の疲れた薄暮に、響板の鈍いうなりをたてる、大きな巾のある靜かな感情。——佛陀の教へた慈悲の哲學！

## 秋晴

牧場の牛が草を食つてゐるのをみて、閑散や怠惰の趣味を解しないほど、それほど近代的になつてしまつた人々にまで、私はいかなる會話をもさけるであらう。私の肌にしみ込んでくる、この秋日和の物倦い眠たさに就いて、この古風なる私の思想の情調に就いて、この上もはや語らないであらう。

## 浪と無明

無明は浪のやうなものだ。生活の物寂しい海の面で、寄せ  
てはくだけくだけてはまたうち寄せ来る。あまた引き去り、  
高まり来る情慾の浪、意志の浪、邪念の浪。何といふことも  
ない暗愁の浪、浪、浪、浪、浪。げにこの寂しい眺望こそは、  
曇天の暗い海の面で、いつも憂鬱に單調な響を繰り返す。  
されば此所の海邊を過ぎて、かの遠く行く砂丘の足跡を踏み

行かうよ。佛陀の寂しい時計に映る、自然の、海洋の、永遠  
の時間を思惟しようよ。いま暮色ある海の面に、寄せてはく  
だけ、くだけてはまた寄せ来る、無明のほの白い浪を眺める。  
もの皆悲しく、憂ひにくづるる濱邊の心ら。



## 陸橋を渡る

憂鬱に沈みながら、ひとり寂しく陸橋を渡つて行く。かつて何物にさへ妥協せざる、何物にさへ安易せざる、この一つの感情をどこへ行かうか。落日は地平に低く、環境は怒りに燃えてる。一切を憎悪し、粉碎し、叛逆し、嘲笑し、斬奸し、敵愾する、この一個の黒い影をマントにつつんで、ひとり寂しく陸橋を渡つて行く。かの高い架空の橋を越えて、はるか  
の幻燈の市街にまで。

## 恐怖への豫感

曠野に彷徨する狼のやうに、一つの鋭どい瞳孔と、一つの飢ゑた心臓とで、地上のあらゆる幻影に噛みつかうする、あるひとの怒りに燃えついた情慾。牙をむき出した感情にまで注意せよ。自然の慘憺たる空の下では。

### 涙ぐましい夕暮

これらの夕暮は涙ぐましく、私の書齋に訪れてくる。思想は情調の影にぬれて、感じのよい温雅の色合を帯びて見える。ああいかに今の私にまで、一つの恵まれた徳はないか。何物の卑劣にすら、何物の虚偽にすら、あへて高貴の寛容を示し得るやうな、一つの穩やかにして閑雅なる徳はないか。——私をして獨り寂しく、今日の夕暮の室に黙思せしめよ。

### 地球を跳躍して

たしかに私は、ある一つの特異な才能を持つてゐる。けれどもそれが丁度あてはまるやうな、どんな特別な「仕事」も今日の地球の上に有りはしない。むしろ私をして、地球を遠く圏外に跳躍せしめよ。

## 宿酔の朝に

泥酔の翌朝に於けるしらじらしい悔恨は、病んで舌をたれた犬のやうで、魂の最も痛々しいところに噛みついてくる。夜に於ての恥かしいこと、醜態を極めたこと、みさげはてたること、野卑と愚劣との外の何物でもないやうな記憶の再現は、砒毒のやうな激烈さで骨の髄まで紫色に變色する。げに宿酔の朝に於ては、どんな酒にも嘔吐を催すばかりである。ふたたびもはや、我等は酒場を訪はないであらう。我等の生

涯に於て、あれらの忌々しい悔恨を繰返さないやうに、斷じて私自身を警戒するであらう。と彼等は腹立たしく決心する。けれどもその日の夕刻がきて、薄暮のわびしい光線がちらばふ頃には、ある故しらぬ孤獨の寂しさが、彼等を場末の巷に徘徊させ、また新しい別の酒場の中に、酔つた幸福を眺めさせる。思へそこでの電燈がどんなに明るく、そこでの世界がどんなに輝やいて見えることぞ。そこでこそ彼は眞に生甲斐のある、ただそればかりが眞理であるところの、唯一の新しい生活を知つたと感ずるであらう。しかもまたその翌朝に於ての悔恨が、いかに苦々しく腹立たしいものであるかを忘れて。げにかくの如きは、あの幸福な飲んだくれの生活では

ない。それこそは我等「詩人」の不幸な生活である。ああ泥酔と悔恨と、悔恨と泥酔と。いかに惱ましき人生の雨景を踏踏することよ。

### 夜汽車の窓で

夜汽車の中で、電燈は暗く、沈鬱した空気の中で、人々は深い眠りに落ちてゐる。一人起きて窓をひらけば、夜風はつめたく肌にふれ、闇夜の暗黒な野原を飛ぶ、しきりに飛ぶ火蟲をみる。ああこの眞つ暗な恐ろしい景色を貫通する！ 深夜の轟々といふ響の中で、いづこへ、いづこへ、私の夜汽車は行かうとするのか。

### 荒寥たる地方での會話

「くづれた廢墟の廊柱と、そして一望の禿山の外、ここには何も見るべきものがない。この荒寥たる地方の景趣には耐へがたい。」「さらば早くここを立ち去らう。この寒空は健康に良ろしくない。」「さて！ 没風流の男よ。君はこの情趣を解さないか、この廢墟を吹きわたる蕭條たる風の音を。舊き景物はすべて頽れ、新しき市街は未だ興されない。いつさいの

信仰は廢つて、瘴煙は地に低く立ち迷つてゐる。ああここで  
の情景は、すべて私の心を傷ましめる。そしてそれ故に、  
に私はこの情景を立ち去るにしのびない。」

## パノラマ館にて

あふげば高い蒼空があり、遠く地平に穹窿は連なつてゐる。見渡す限りの平野のかなた、仄かに遠い山脈の雪が光つて、地平に低く夢のやうな雲が浮んでゐる。ああこの自然をながれゆく静かな情緒をかんず。遠く眺望の消えて盡きるところは雲か山か。私の幻想は涙ぐましく、遙かな遙かな風景の涯を追ふて夢にさまよふ。

聴け、あの悲しげなオルゴールはどこに起るか。忘れた世紀の夢をよび起す、あの古めかしい音楽の音色はどこに。さび

しく、かなしく、物あはれに。ああマルセイユ、マルセイユ、マルセイユ……。どこにまた遠く、遠方からの喇叭のやうに、鏗ある朗らかなのべースは鳴りわたる。げにかの物倦げなべースは夢を語る。

「ああ、ああ、歴史は忘れゆく夢のごとし。時は西暦千八百十五年。所はワータルローの平原。あちらに遠く見える一葦の水はマース河。こなた一圓の人家は佛蘭西の村落にございます。史をひもとけば六月十八日。佛蘭西の皇帝ナポレオン一世は、この所にて英普聯合軍と最後の決戦をいたされました。こなた一帯は佛蘭西軍の砲兵陣地、あれなる小高き丘に立てる馬上の人は、これを即ち蓋世の英雄ナポレオン・ボナパ

ルト。その側に立てるはネー將軍、ナポレオン麾下の名將にして、鬼と呼ばれた人でございます。あれなる平野の大軍は英將ウエリントンの一隊。こちらの麥畑に累々と倒れて居ますのは、皆之れ佛蘭西兵の死骸でございます。無慘やあまたの砲車は敵弾に撃ち碎かれ、鮮血あたりの草を染めるありさま。ああ悲風蕭々たるかなワータルロー。さすが千古の英雄ナポレオン一世も、この戦ひの敗軍によりまして、遠くセントヘレナの孤島に幽囚の身となりました。こちらをご覽んなさい。三角帽に白十字の襟をかけ、あれなる間道を突撃する一隊はナポレオンの近衛兵。その側面を射撃せるはイギリスの遊撃隊でございます。あなたに遙か遠く山脈の連なるとこ

ろ。煙の如く砂塵を蹴立てて來る軍馬の一隊は、これぞ即ち普魯西の援軍にして、ブリッヘル將軍の率ゐるものでございます。時は西曆一八一五年、所は佛蘭西の國境ワータルロー。――ああ、ああ、歴史は忘れゆく夢のごとし――  
 明るい日光の野景の涯を、わびしい砲煙の白くただよふ。静かな白日の夢の中で、幻聽の砲聲は空に轟ろく。いづこぞ、いづこぞ、かなしいオルゴルの音の地下にきこゆる。あはれこの古びたバナラマ館！ 幼ない日の遠き追憶のバナラマ館！ かしこに時劫の昔はただよひる。ああかの暗い隧路の向ふに、天幕の青い幕の影に、いつもさびしい光線のただよひる。

## 喘ぐ馬を驅る

日曜の朝、毛並の艶々とした二頭の駿馬を驅つて、輕洒な馬車を郊外の並木路に走らせる。といったのとは、全然反對の風景がそこにありはしないか。曇天の重い空の下で、行き悩んだ運搬車。馭者はしきりにあせるけれども、馱馬が少しも動かないといったやうな、さういふ息苦しい景色がありはしないか。いかに思想家よ。すつかりと荷造りされたる思想の前に、言葉が逡巡して進まないといふやうな、我等の鬱陶しき日和の多いことよ。

## 春のくる時

扇もつ若い娘ら、春の屏風の前に居て、君のしなやかな肩をすべらせ、艶めかしい曲線は足にからむ。扇もつ若い娘ら、君の笑顔に情をふくめよ、春は來らんとす。



## AULD LANG SYNE!

波止場に於て、今や出帆しようとする船の上から、彼の合圖をする人に注意せよ。きけ、どんな悦ばしい告別が、どんな氣の利いた挨拶が、彼の見送りの人々にまで語られるか。今や一つの精神は、海を越えて軟風の沖へ出帆する。されば健在であれ、親しき、懐かしき、また敵意ある、敵意なき、正に私から忘られようとしてゐる知己の人々よ。私は遠く行き、もはや君らと何の煩はしい交渉もないであらう。そして君らはまた、正に君らの陸地から立去らうとする帆影にまで、

あのほつとした氣輕さの平和——すべての見送人が感じ得るところの、あの氣の輕々とした幸福——を感じるであらう。もはやそこには、何の鬱陶しい天氣もなく、來るべき航海日和の、いかに晴々として麗らかに知覺さることぞ。おお今、碇をあげよ水夫ども。おーるぼーと……聴け！ あの音楽は起る。見送る人、見送られる人の感情にまで、さばかり涙ぐましい「忘却の悦び」を感じさせるところの、あの古風なるスコットランドの旋律は！ *Should auld acquaintance be forgot, and never brought to mind! Should auld acquaintance be forgot, and lang syne!*

## 木偶芝居

あの怪人物が手にもつ一つの巨大な棒を見よ。それが高くふりあげられ、力を込めてまつすぐに打ちおろす時、あれらの家屋は破壊され、めちやくちやになり、警官の如きもの、隊長の如きもの、ピア樽の如きもの、横倒しにされ、その遠心力でもつて舞臺の圏外へ吹つとばされる。そこで青白い音楽のリズムが起り、すばらしい巨きな月が舞臺の空へ昇つて

くる。ぐんぐんぐんぐんと上の方へ、とめどもなく高く昇る。おおその時、その時、その破壊された家の下から、どんな一つの物悲しい言葉が聴えてくるか——一つの怪奇な木偶の靈魂は、かれの細長い舌を以てすら「幽冥に於ける思想」を語るであらう。喇叭を吹くやうなバスの調子で。

## 極光地方から

海豹のやうに、極光の見える氷の上で、ぼんやりと「自分を忘れて」座つてゐたい。そこに時劫がすぎ去つて行く。晝夜のない極光地方の、いつも暮れ方のやうな光線が、鈍く悲しげに幽滅するところ。ああその遠い北極圏の氷の上で、ぼんやりと海豹のやうに座つて居たい。永遠に、永遠に、自分を忘れて、思惟のほの暗い海に浮ぶ、一つの佗しい幻象を眺めて居たいのです。

## 斷橋

夜道を走る汽車まで、一つの赤い燈火を示せよ。今そこに危険がある。斷橋！ 斷橋！ ああ悲鳴は風をつんざく。だがそれを知らるか。精神は闇の曠野をひた走る。急行し、急行し、急行し、彼の悲劇の終驛へと。

## 運命への忍辱

とはいへ環境の闇を突破すべき、どんな力がそこにあるか。  
 齒がみてこらへよ。こらへよ。こらへよ。こらへよ。

## 寂寥の川邊

古驛の、柳のある川の岸で、かれは何を釣らうとするのか。  
 やがて生活の薄暮がくるまで、そんなにも長い間、針のない  
 釣竿で……。『否』とその支那人が答へた。『魚の美しく走るを  
 眺めよ、水の静かに行くを眺めよ。いかに君はこの静謐を好  
 まないか。この風景の聰明な情趣を。むしろ私は、終日釣<sup>り</sup>  
 得<sup>ない</sup>ことを希望してゐる。されば日<sup>向</sup>り好<sup>い</sup>寂寥の岸邊に  
 座して、私のどんな環境をも亂すなかれ。』

## 船室から

嵐、嵐、浪、浪、大浪、大浪、大浪。傾むく地平線、上昇する地平線、落ちくる地平線。がちやがちや、がちやがちや。上甲板へ、上甲板へ。鎖チエンを巻け、鎖チエンを巻け。突進する、突進する水夫ら。船室の窓、窓、窓。傾むく地平線、上昇する地平線。鎖チエン、鎖チエン、鎖チエン。風、風、風。水、水、水。船窓ハッチを閉めろ。船窓ハッチを閉めろ。右舷へ、左舷へ。浪、浪、浪。ほひゆる。ほひゆる。ほひゆる。

## 田舎の時計

田舎に於ては、すべての人々が先祖と共に生活してゐる。老人も、若者も、家婦も、子供も、すべての家族が同じ藁屋根の下に居て、祖先の煤黒い位牌を飾つた、古びた佛壇の前で臥起してゐる。

さうした農家の裏山には、小高い冬枯れの墓丘があつて、彼等の家族の長い歴史が、あまたの白骨と共に眠つてゐる。やがて生きてゐる家族たちも、またその同じ墓地に葬られ、

昔の曾祖母や祖父と共に、しづかな單調な夢を見るであらう。田舎に於ては、郷黨のすべてが縁者であり、系圖の由緒ある血をひいてゐる。道に逢ふ人も、田畑に見る人も、隣家に住む老人夫妻も、遠きまたは近き血統で、互にすべての村人が縁邊する親戚であり、昔からつながる叔父や伯母の一族である。そこではだれもが家族であつて、歴史の古き、傳統する、因襲のつながる「家」の中で、郷黨のあらゆる男女が、祖先の幽霊と共に生活してゐる。

田舎に於ては、すべての家々の時計が動いてゐない。そこでは古びた柱時計が、遠い過去の曆の中で、先祖の幽霊が生きてゐた時の、同じ昔の指盤を指してゐる。見よ！そこに

は昔のままの村社があり、昔のままの白壁があり、昔のままの自然がある。そして遠い曾祖母の過去に於て、かれらの先祖が縁組をした如く、今も同じやうな縁組があり、のどかな村落の籬せきの中では、昔のやうに、牛や鶏の聲がしてゐる。

げに田舎に於ては、自然と共に悠々として實在してゐる、ただ一の永遠な「時間」がある。そこには過去もなく、現在もなく、未來もない。あらゆるすべての生命が、同じ家族の血すじであつて、冬のさびしい墓地の丘で、かれらの不滅の先祖と共に、一つの靈魂と共に生活してゐる。晝も、夜も、昔も、今も、その同じ農夫の生活が、無限に單調につづいてゐる。その環境には變化がない。すべての先祖のあつたや

うに、先祖の持った農具をもち、先祖の耕した仕方でもつて、不変に同じく、同じ時間を續けて行く。變化することは破滅であり、田舎の生活の没落である。なぜならば時間が斷絶して、永遠に生きる實在から、その鎖が切れてしまふ。彼等は先祖のそばに居り、必死に土地を離れることを欲しない。なぜならば土地を離れて、家郷とすべき住家はないから。そこには擴がりもなく、觸りもなく、無限に實在してゐる空間がある。

荒寥とした自然の中で、田舎の人生は孤立してゐる。婚姻も、出産も、葬式も、すべてが部落の壁の中で、仕切られた時空の中で行はれてゐる。村落は悲しげに寄り合ひ、蕭條た

る山の麓で、人間の孤獨にふるへてゐる。そして眞暗な夜の空で、もろこしの葉がざわざわと風に鳴る時、農家の薄暗い背戸の厩に、かすかに蠟燭の光がもれてゐる。馬もまた、そのこの暗闇にうづくまつて、先祖と共に眠つてゐるのだ。永遠に、永遠に、過去の遠い昔から居た如くに。

## 球轉がし

曇った、陰鬱の午後であつた。どんよりとした太陽が、雲の厚みからして、鈍い光を街路の砂に照らしてゐる。人々の氣分は重苦しく、うなだれながら、馬のやうに風景の中を彷徨してゐる。

いま、何物の力も私の中に生れてゐない。意氣は消沈し、情熱は涸れ、汗のやうな惡寒がきびわるく皮膚の上に流れて

ゐる。私は壓しつぶされ、稀薄になり、地下の底に滅入つてしまふのを感じてゐた。

ふと、ある賑やかな市街の裏通り、露店や飲食店のごてごとと並んでゐる、日影のまづしい横町で、私は古風な球轉がしの屋臺を見つけた。

「よし！ 私の力を試してみよう。」

つまらない賭けごとが、病氣のやうにからまつてきて、執拗に自分の心を苛らだたせた。幾度も幾度も、赤と白との球が轉り、そして意地悪く穴の周圍をめぐつて逃げた。あらゆる機因キエンがからかひながら、私の意志の届かぬ彼岸で、熱望のそれた標的に轉がり込んだ。



「何物もない！何物もない！」

私は齒を食ひしばつて絶叫した。いかなればかくも我々は無力であるか。見よ！意志は完全に否定されてる。それが感じられるほど、人生を勇氣する理由がどこにあるか？

たちまち、若々しく明るい聲が耳に聴えた。連葉な、はしやいだ、連れ立つた若い女たちが來たのである。笑ひながら戯れながら、無造作に彼女の一人が球を投げた。

「當り！」

一時に騒がしく、若い、にぎやかな凱歌と笑聲が入り亂れた。何たる名譽ぞ！チャンピオンぞ！見事に、彼女は我の絶望に打ち勝つた。笑ひながら、戯れながら、嬉々とし

て運命を征服し、すべての鬱陶しい氣分を開放した。もはや私は、ふたたび考へこむことをしないであらう。

## 鯉幟を見て

青空に高く、五月の幟が吹き流れてゐる。家々の屋根の上に、海や陸や畑を越えて、初夏の日光に輝きながら、朱金の勇ましい魚が泳いでゐる。

見よ！そこに子供の未来が祝福されてゐる。空高く登る榮達と、名譽と、勇氣と、健康と、天才と。とりわけ權力へのエゴイズムの野心が象徴されてゐる。ふしぎな、欲望にみちた

## 五月の魚よ！

しかしながら意志が、風のない深夜の屋根で失喪してゐる。だらしなく尾をたらしめて、グロテスクの魚が死にかかつてゐる。丁度、あはれな小供等の寢床の上で、彼の氣味の悪い未来がぶらさがり、重苦しく沈黙してゐる。どうして親たちが、早く小供の夢魔を醒してやらないのか？ たよりない小さい心が、恐ろしい夢の豫感におびえてゐる。やがて近づくであらう所の、彼の残酷な教育から、防ぎたい疾病から、性の痛い苦悶から。とりわけ社會の缺陷による、さまざまの不幸な環境から。

けれども朝の日がさし、新しい風の吹いてくる時、ふたた

び魚はその意志を回復する。彼等は勇ましくなるであらう。ただ人間の非力でなく、自然の氣まぐれな氣流ばかりが、我の自由意志に反對しつつ、あへて子供等の運命を占筮する。

### 記憶を捨てる

森からかへるとき、私は帽子をぬぎすてた。ああ、記憶。恐ろしく破れちぎった記憶。みじめな、泥水の中に腐った記憶。さびしい雨景の道にふるふる私の帽子。背後に捨てて行く。

情緒よ！ 君は歸らざるか

書生は町に行き、工場の下を通り、機關車の鳴る響を聞いた。火夫の走り、車輪の廻り、群鴉の喧騒する巷の中で、はや一つの胡弓は荷造され、貨車に積まれ、さうして港の倉庫の方へ、税關の門をくぐつて行つた。

十月下旬。書生は飯を食はうとして、枯れた芝草の倉庫の影に、音樂の忍び居り、蟋蟀のやうに鳴くのを聞いた。

——情緒よ、君は歸らざるか。

港の雜貨店で

この鉄の槓力でも、女の錆びついた銅牌ダウが切れないのか。  
水夫よ！ 汝の隠衣かひしの錢をかぞへて、無用の情熱を捨ててしまへ！

## ○ 死なない蛸

或る水族館の水槽で、ひさしい間、飢ゑた蛸が飼はれてゐた。地下の薄暗い岩の影で、青ざめた玻璃天井の光線が、いつも悲しげに漂つてゐた。

だれも人々は、その薄暗い水槽を忘れてゐた。もう久しい以前に、蛸は死んだと思はれてゐた。そして腐つた海水だけが、埃つばい日ざしの中で、いつも硝子窓の槽にたまつてゐた。

けれども動物は死ななかつた。蛸は岩影にかくれて居ただ。そして彼が目を覺した時、不幸な、忘れられた槽の中で、幾日も幾日も、おそろしい飢饉を忍ばねばならなかつた。どこにも餌食がなく、食物が全く盡きてしまつた時、彼は自分の足をもいで食つた。まづその一本を。それから次の一本を。それから、最後に、それがすつかりおしまひになつた時、今度は胴を裏がへして、内臓の一部を食ひはじめた。少しづつ他の一部から一部へと。順々に。

かくして蛸は、彼の身體全體を食ひつくしてしまつた。外皮から、脳髓から、胃袋から。どこもかしこも、すべて残る限なく。完全に。

或る朝、ふと番人がそこに來た時、水槽の中は空っぽになつてゐた。曇つた埃っぽい硝子の中で、藍色の透き通つた潮水と、なよなよした海草とが動いてゐた。そしてどこの岩の隅々にも、もはや生物の姿は見えなかつた。蛸は實際に、すつかり消滅してしまつたのである。

けれども蛸は死ななかつた。彼が消えてしまつた後ですらも、尙ほ且つ永遠にそこに生きてゐた。古ぼけた、空っぽの、忘れられた水族館の槽の中で。永遠に——おそらくは幾世紀の間を通じて——或る物すごい缺乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た。

## 鏡

鏡のうしろへ廻つてみても、「私」はそこに居ないのですよ。  
お嬢さん！

## 狐

見よ！ 彼は風のやうに来る。その額は憂鬱に青ざめてる。耳はするどく切つ立ち、まなじりは怒に裂けてゐる。君よ！ 狡智<sup>◎</sup>のかくの如き美しき表情をどこに見たか。

## 吹雪の中で

単に孤獨であるばかりでない。敵を以て充たされてゐる！

## 銃器店の前で

明るい硝子戸の店の中で、一つの磨かれた銃器さへも、火薬を装填してないのである。——何たる虚妄ぞ。懶爾として笑へ！

## 虚数の虎

博徒等集まり、投げつけられたる生涯の機因チャンスの上で、虚数の情熱を賭け合つてゐる。みな兇暴のつら魂たましひ。仁義じんぎを構へ、虎のやうな空洞に居る。



## 自然の中で

荒寥とした山の中腹で、壁のやうに沈黙してゐる、一の大なる耳を見た。

## 觸手ある空間

宿命的なる東洋の建築は、その屋根の下で忍従しながら、  
臺いらかに於いて怒り立つてゐる。

## 大佛

その内部に構造の支柱を持ち、暗い梯子と經文を藏する佛  
陀よ！海よりも遠く、人畜の住む世界を越えて、指のやう  
に尨大なれ！

## 家

人が家の中に住んでるのは、地上の悲しい風景である。

## 黒い洋傘

憂鬱の長い柄から、雨がしとしとと滴しずくをしてゐる。眞黒の大きな洋傘！

## 國境にて

その背後うしろに煤煙と傷心を曳かないところの、どんな長列の汽車も進行しない！

### 恐ろしき人形芝居

理髪店の青い窓から、葱のやうに突き出す棍棒。そいつの馬鹿らしい機械仕掛で、夢中になぐられ、なぐられて居る。

### 齒をもてる意志

意志！ そは夕暮の海よりして、鱧の如くに泳ぎ來り、齒を以て肉に噛みつけり。

## 墓

これは墓である。蕭條たる風雨の中で、かなしく黙しながら、孤獨に、永遠の土塊が存在してゐる。

何がこの下に、墓の下にあるのだらう。我々はそれを考へ得ない。おそらくは深い穴が、がらんどくに掘られてゐる。さうして僅かばかりの物質——人骨や、齒や、瓦や——が、蟾蜍けつごと一緒に同棲して居る。そこには何も無い。何物の生命

も、意識も、名譽も。またその名譽について感じ得るであらう存在もない。

尙ほしかしながら我々は、どうしてそんなに悲しく、墓の前を立ち去ることができないだらう。我々はいつでも、死後の「無」について信じてゐる。何物も残りはない。我々の肉體は解體して、他の物質に變つて行く、思想も、神經も、感情も、そしてこの自我の意識する本體すらも、空無の中に消えてしまふ。どうして今日の常識が、あの古風な迷信——死後の生活——を信じよう。我々は死後を考へ、いつも風のように咲笑するのみ！

しかしながら尙ほ、どうしてそんなに悲しく、墓の前を立

ち去ることができないだらう。我々は不運な藝術家で、あらゆる逆境に忍んで居る。我々は孤獨に耐へて、ただ後世にまで残さるべき、死後の名譽を考へてゐる。ただそのみを考へてゐる。けれどもああ、人が墓場の中に葬られて、どうして自分を意識し得るか。我々の一切は終つてしまふ。後世になつてみれば、墓場の上に花輪を捧げ、數萬の人が自分の名作を讚へるだらう。ああしかし！ だれがその時墓場の中で、自分の名譽を意識し得るか？ 我々は生きねばならない。死後にも尙ほ且つ、永遠に墓場の中で、生きて居なければならぬのだ。

蕭條たる風雨の中で、さびしく永遠に黙しながら、無意味

の土塊が實在して居る。何がこの下に、墓の下にあるだらう。我々はそれを知らない。これは墓である！ 墓である！

## 神々の生活

ひどく窮乏に悩まされ、乞食のやうな生涯を終つた男が、熱心に或る神を信仰し、最後迄も疑はず、その全能を信じて居た。

「あなたもまた、この神様を信仰なさい。疑ひもなく、屹度、御利益がありますから」臨終の床の中でも、彼は逢ふ人毎にそれを説いた。だが人々は可笑しく思ひ、彼の言ふことを信じなかつた。なぜと言つて、神がもし本當の全能なら、この

不幸な貧しい男を、生涯の乞食にはしなかつたらう。信仰の御利益は、もつと早く、すくなくとも彼が死なない前に、多少の安樂な生活を恵んだらう。

「乞食もまた神の恩恵を信するか！」

さう言つて人々は哄笑した。しかしその貧しい男は、手を振つて答辯し、神のあらたかな御利益につき、熱心になつて實證した。例へば彼は、今日の一日の仕事を得るべく、天が雨を降らさぬやうに、時々その神に向つて祈願した。或はまた金十錢の飯を食ふべく、それだけの収入が有り得るやうに、彼の善き神に向つて哀願した。そしてまた、時に合宿所の割寢床で、彼が温き夜具の方へ、順番を好都合にしてもらへる

ことを、密かにその神へ歎願した。そしてこれ等の祈願は、概ねの場合に於て、神の聴き入れるところとなつた。いつでも彼は、その信仰のために恵まれて居り、神の御利益から幸福だつた。もちろんその貧しい男は、より以上に「全能なもの」を考へ得ず、想像することもなかつた。

人生について知られるのは、全能の神が一人でなく、到るところにあることである。それらの多くの神々たちは、野道の寂びしい辻のほとりや、田舎の小さな森の影や、景色の荒寥とした山の上や、或は裏街の入り込んでゐる、貧乏な長屋の露路に祀られて居り、人間共の侘しげな世界の中で、しづかに情趣深く生活して居る。

## ○郵便局

郵便局といふものは、港や停車場と同じく、人生の遠い旅情を思はすところの、悲しいのすたるぢやの存在である。局員はあわただしげにスタンプを捺し、人々は窓口に群がつてゐる。わけても貧しい女工の群が、日給の貯金通帳を手にしなから、窓口前列をつくつて押し合つてゐる。或る人々は爲替を組み入れ、或る人々は遠國への、かなしい電報を打たうとしてゐる。



いつも急がしく、あわただしく、群衆によつてもまれてゐる、不思議な物悲しい郵便局よ。私はそこに來て手紙を書き、そこに來て人生の郷愁を見るのが好きだ。田舎の粗野な老婦が居て、側の人にたのみ、手紙の代筆を懇願してゐる。彼女の貧しい村の郷里で、孤獨に暮らしてゐる娘の許へ、秋の裕や襦袢やを、小包で送つたといふ通知である。

郵便局！ 私はその郷愁を見るのが好きだ。生活のさまざまな悲哀を抱きながら、その薄暗い壁の隅で、故郷への手紙を書いてゐる若い女よ！ 鉛筆の心も折れ、文字も涙によこれて亂れてゐる。何をこの人生から、若い娘たちが苦しむだらう。我々にもまた君等と同じく、絶望のすり切れた靴をは

いて、生活の港々を漂泊してゐる。永遠に、永遠に、我々の家なき魂は凍えてゐるのだ。

郵便局といふものは、港や停車場と同じやうに、人生の遠い旅情を思はすところの、魂の永遠ののすたるぢやだ。

## 航海の歌

南風のふく日、椰子の葉のそよぐ島をはなれて、遠く私の船は海洋の沖へ帆ばしつて行つた。浪はきらきらと日にかがやき、美しい魚が舷側にをどつて居た。

この船の甲板ていぱの上に、私はいろいろの動物を飼つてゐた。猫や、孔雀や、鶯や、はつか鼠や、豹や、駱駝や、獅子やを乗せ、さうして私の航海の日和がつづいた。私は甲板の藤椅子に寐ころび、さうして夢見心地のする葉蘭の影に、いつも

香氣の高いまにら煙草をくはへて居た。ああ、いまそこに幻想の港を見る。白い雲の浮んでゐる、美麗にして寂しげな植民地の港を見る。

かくの如くにして、私は航海の朝を歌ふのである。孤獨な思想家の VISION に浮ぶ、あ。の。うれしき朝の船出を語るのがある。ああ、だれがそれを聴くか？

## 海

海を越えて、人々は向うに「ある」ことを信じてゐる。島が、陸が、新世界が。しかしながら海は、一の廣茫とした眺めにすぎない。無限に、つかみどころがなく、單調で飽きつばい景色を見る。

海の印象から、人々は早い疲労を感じてしまふ。浪が引き、また寄せてくる反復から、人生の退屈な日課を思ひ出す。そして日向の砂丘に寝ころびながら、海を見てゐる心の隅に、

ある空漠たる、不満の苛ただしきを感じてくる。

海は、人生の疲労を反映する。希望や、空想や、旅情やが、浪を越えて行くのではなく、空間の無限における地平線の切断から、限りなく單調になり、想像の棲むべき山影を消してしまふ。海には空想のひだがなく、見渡す限り、平板で、白晝の太陽が及ぶ限り、その「現實」を照らしてゐる。海を見る心は空漠として味氣がない。しかしながら物憂き悲哀が、ふだんの浪音のやうに迫ってくる。

海を越えて、人々は向うにあることを信じてゐる。島が、陸が、新世界が。けれども、ああ！もし海に来て見れば、海は我々の疲労を反映する。過去の長き、厭はしき、無意味

な生活の旅の疲れが、一時に漠然と現はれてくる。人々はげつそりとし、ものうくなり、空虚なさびしい心を感じて、磯草の枯れる砂山の上にくづれてしまふ。

人々は熱情から——戀や、旅情や、ロマンスから——しばしば海へあこがれてくる。いかにひろびろとした、自由な明るい印象が、人々の眼をひろくすることぞ！ しかしながらただ一瞬。そして夕方の疲労から、にはかに老衰してかへつて行く。

海の巨大な平面が、かく人の觀念を正誤する。

## 建築の Nostalgia

建築——特に群團した建築——の様式は、空の穹窿に對して構想されねばならぬ。即ち切斷されたる球の弧形に對して、槍狀の垂直線や、圓錐形やの交錯せる構想を用意すべきである。

この蒼空の下に於ける、遠方の都會の印象として、おほむねの建築は一つの重要な意匠を忘れてゐる。

## 初夏の歌

今は初夏！ 人の認識の目を新しくせよ。我々もまた自然と共に青々しくならうとしてゐる。古きくすぼつた家を捨てて、渡り鳥の如く自由になれよ。我々の過去の因襲から、いはれなき人倫から、既に廢つてしまつた眞理から、社會の愚かな習俗から、すべての朽ちはてた執着の繩を切らうぢやないか。

青春よ！ 我々もまた鳥のやうに飛ばうと思ふ。けれども聴け！ だれがそこに隠れてゐるのか？ 戸の影に居て、啄木鳥のやうに叩くものはたれ？ ああ君は「反響」か。老いたる幽霊よ！ 認識の向ふに去れ！

## 女のいぢらしさ

「女のいぢらしさは」とグウルモンが言つてる。「何時、何處で、どこから降つて来るかも知れないところの、見たことも聞いたこともない未來の良人を、貞淑に慎ましく待つてるとだ。」と。

家の奥まつた部屋の中で、終日雀の鳴聲を聴きながら、優しく、惱ましく、恥かしげに、思ひをこめて針仕事をして居る娘を見る時、私はいつもこの抒情味の深い、そして多分に

加特力教的な詩人の言葉を思ひ起す。

いぢらしくもまた、私の親しい友が作った、日本語の美しい歌を一つ。

君がかはゆげなる机卓の上に

色も朱なる小箱には

なにを秘めたまへるものならむ。

われ君が窓べを過ぎむとするとき

小箱の色の目にうつり

心をどりて止まず。

そはやはらかきりぼんのたぐひか

もしくは、うら若き娘心を述べつづる

若い未婚の娘たちは、情緒の空想でのみ生活して居る。丁度彼女等は、昔の草双紙に物語られてる、仇敵討ちの武士みたいなものである。その若く悲しい武士たちは、何時、何處で、如何にして廻り逢ふかも解らない仇敵を探して、あてもなく國々を彷徨ひ歩き、偶然の奇蹟を祈りながら、生涯を疲労の旅に死んでしまふ。

昔のしをらしい娘たちは、かうした悲しい物語を、我が身の上にはいき比べ、行燈の暗い灯影で読み耽つた。同じやうにまた、今日の新時代の娘たちが、活動寫真や劇場の座席の隅

で、ひそかに未來の良人を空想しながら、二十世紀の草双紙を読み耽つて居る。その新しい草双紙で、ヴァレンチノや林長二郎のやうな美男が扮する、架空の人物を現實の夢にたづねて、いちらしくも處女の胸をときめかして居る。そして目算もなく、計畫もなく、偶然の廻合のみを祈りながら、追剥の出る街道や、辻堂や笹原のある景色の中を、悲しく叔しげに漂泊して居る。昔の物語の作者たちは、さうした悲しい數の旅行の後で、それでも、漸く最後に取つて置きの籤をひかせて、首尾よく願望を成就させた。だが若し、現實の人生がさうでなければ！ そそも如何に。女のいちらしさは無限である。

## 父

父は永遠に悲壯である。

## 敵

敵は常に哄笑してゐる。さうでもなければ、何者の表象が怒らせるのか？



## 物質の感情

機械人間にもし感情があるとすれば？ 無限の哀傷のほか  
の何者でもない。

## 物體

私がもし物體であらうとも、神は再度朗らかに笑ひはしな  
い。ああ、琴の音が聴えて来る。——小さな一つの倫理<sup>モラル</sup>が、喪  
失してしまったのだ。

## 自殺の恐ろしさ

自殺そのものは恐ろしくない。自殺に就いて考へるのは、死の刹那の苦痛でなくして、死の決行された瞬時に於ける、取り返しのつかない悔恨である。今、高層建築の五階の窓から、自分は正に飛び下りようと用意して居る。遺書も既に書き、一切の準備は終つた。さあ！目を閉ぢて、飛べ！そして自分は飛びおりた。最後の足が、遂に窓を離れて、身體が空中に投げ出された。

だがその時、足が窓から離れた一瞬時、不意に別の思想が浮び、雷光のやうに閃めいた。その時始めて、自分ははつきりと生活の意義を知つたのである。何たる愚事ぞ。決して、決して、自分は死を選ぶべきでなかつた。世界は明るく、前途は希望に輝やいて居る。断じて自分は死にたくない。死にたくない。だがしかし、足は既に窓から離れ、身體は一直線に落下して居る。地下には固い鋪石。白いコンクリート。血に塗れた頭蓋骨！避けられない決定！

この幻想の恐ろしさから、私はいつも白布のやうに蒼ざめてしまふ。何物も、何物も、決してこれより恐ろしい空想はない。しかもこんな事實が、實際に有り得ないといふことは

無いだらう。既に死んでしまつた自殺者等が、再度もし生きて口を利いたら、おそらくこの實驗を語るであらう。彼等はすべて、墓場の中で悔恨してゐる幽霊である。百度も考へて恐ろしく、私は夢の中でさへ戦慄する。

## 龍

龍は帝王の欲望を象徴してゐる。権力の祥雲に乗つて居ながら、常に憤ほろしい悲怒に燃え、不斷の争闘のために牙をむいてゐる。

## 時計を見る狂人

或る瘋癲病院の部屋の中で、終日椅子の上に坐り、爲すこともなく、毎日時計の指針を凝視して居る男が居た。おそろく世界中で、最も退屈な、「時」を持って餘して居る人間が此處に居る、と私は思った。ところが反對であり、院長は次のやうに話してくれた。この不幸な人は、人生を不斷の活動と考へて居るのです。それで一瞬の生も無駄にせず、貴重な時間を浪費すまいと考へ、ああして毎日、時計をみつめて居るの

です。何か話しかけてご覧なさい。屹度腹立たしげに呶鳴るでせう。「黙れ！　いま貴重な一秒時が過ぎ去つて行く。Time is life! Time is life!」と。

## 群集の中に居て

群集は孤獨者の家郷である。   ボードレエル

都會生活の自由さは、人と人との間に、何の煩瑣な交渉もなく、その上にまた人々が、都會を背景にするところの、楽しい群集を形づくつて居ることである。

晝頃になつて、私は町のレストラントに坐つて居た。店は賑やかに混雑して、どの卓にも客が溢れて居た。若い夫婦づれや、學生の一組や、子供をつれた母親やが、あちこちの卓

に坐つて、彼等自身の家庭のことや、生活のことやを話して居た。それらの話は、他の人々と關係がなく、大勢の中に混つて、彼等だけの仕切られた會話であつた。そして他の人々は、同じ卓に向き合つて坐りながら、隣人の會話とは關係なく、夫々また自分等だけの世界に屬する、勝手な仕切られた話をしやべつて居た。

この都會の風景は、いつも無限に私の心を楽しませる。ここでは人々が、他人の領域と交渉なく、しかもまた各人が全體としての雰圍氣(群集の雰圍氣)を構成して居る。何といふ無關心な、伸々とした、楽しい忘却をもつた雰圍氣だらう。

黄昏になつて、私は公園の椅子に坐つて居た。幾組もの若

い男女が、互に腕を組み合せながら、私の坐つてゐる前を通つて行つた。どの組の戀人たちも、嬉しく楽しさうに話をして居た。そして互にまた、他の組の戀人たちを眺め合ひ、批判し合ひ、その美しい伴奏から、自分等の空にひろがるところの、戀の楽しい音楽を二重にした。

一組の戀人が、ふと通りかかつて、私の椅子の側に腰をおろした。二人は熱心に、笑ひながら、羞かみながら嬉しさうに囁いて居た。それから立ち上り、手をつないで行つてしまつた。始めから彼等は、私の方を見向きもせず、私の存在さへも、全く認識しないやうであつた。

都會生活とは、一つの共同椅子の上で、全く別々の人間が

別々のことを考へながら、互に何の交渉もなく、一つの同じ空を見てゐる生活——群集としての生活——なのである。その同じ都會の空は、あの宿なしのルンペンや、無職者や、何處へ行くといふあてもない人間やが、てんでに自分のことを考へながら、ぼんやり並んで坐つてゐる、淺草公園のベンチの上にもひろがつて居て、灯ともし頃の都會の情趣を、無限に侘しげに見せるのである。

げに都會の生活の自由さは、群集の中に居る自由さである。群集は一人一人の單位であつて、しかも全體としての綜合した意志をもつてゐる。だれも私の生活に交渉せず、私の自由を束縛しない。しかも全體の動く意志の中で、私がまた物を考

へ、爲し、味ひ、人々と共に楽しんで居る。心のいたく疲れた人、重い悩みに苦しむ人、わけても孤獨を寂しむ人、孤獨を愛する人によつて、群集こそは心の家郷、愛と慰安の住家である。ボードレエルと共に、私もまだ一つのさびしい歌を唄はう。——都會は私の戀人。群集は私の家郷。ああ何處までも、何處までも、都會の空を徘徊しながら、群集と共に歩いて行かう。浪の彼方は地平に消える、群集の中を流れて行かう。

## 橋

すべての橋は、一つの建築意匠しか持つてゐない。時間的空間の上に架け、或る夢幻的な一つの觀念を、現實的に辨證することの熱意である。

橋とは——夢を架空した數學である。

### 詩人の死ぬや悲し

ある日の芥川龍之介が、救ひのない絶望に沈みながら、死の暗黒と生の無意義について私に語った。それは語るのではなく、むしろ訴へてゐるのであつた。

「でも君は、後世に残るべき著作を書いてる。その上にも高い名聲がある。」

ふと、彼を慰めるつもりで言つた私の言葉が、不幸な友を逆に刺戟し、眞剣になつて怒らせてしまつた。あの小心で、

羞かみやで、いつもストイックに感情を隠す男が、その時顔色を變へて烈しく言つた。

「著作？ 名聲？ そんなものが何になる！」

獨逸のある瘋癲病院で、妹に看護されながら暮して居た、晩年の寂しいニイチエが、或る日ふと空を見ながら、狂氣の頭腦に追憶をたぐつて言つた。——おれも昔は、少しばかりの善い本を書いた！ と。

あの傲岸不遜のニイチエ。自ら稱して「人類史以來の天才」と傲語したニイチエが、これはまた何と悲しく、痛々しさの眼に沁みる言葉であらう。側に泣きぬれた妹が、兄を慰める爲に言つたであらう言葉は、おそろく私が、前に自殺した友



に語つた言葉であつたらう。そしてニイチエの答へた言葉が、同じやうにまた、空洞な悲しいものであつたらう。

「そんなものが何になる！ そんなものが何になる！」

ところが一方の世界には、彼等と人種のちがつた人が住んでる。トラファルガルの海戦で重傷を負つたネルソンが、軍醫や部下の幕僚たちに圍まれながら、死にのぞんで言つた言葉は有名である。「余は祖國に對する義務を果たした」と。ピスマルクや、ヒンデンブルグや、伊藤博文や、東郷大將やの人々が、おそろくはまた死の床で、靜かに過去を懷想しながら、自分の心に向つて言つたであらう。

「余は、余の爲すべきすべてを盡した」と。そして安らかに

微笑しながら、心に満足して死んで行つた。

それ故に諺は言ふ。鳥の死ぬや悲し、人の死ぬや善しと。

だが我々の側の地球に於ては、それが逆に韻律され、アクセントの強い言葉で、もつと惱み深く言ひ換へられる。

——人の死ぬや善し。詩人の死ぬや悲し！

### 主よ。休息をあたへ給へ！

行く所に用ゐられず、飢ゑた獣のやうに零落して、支那の曠野を漂泊して居た孔子が、或る時河のほとりに立つて言つた。

「行くものはかくの如きか。晝夜をわかたず。」

流れる水の悲しさは、休息が無いといふことである。夜、萬象が沈黙し、人も、鳥も、木も、草も、すべてが深い眠りに落ちてゐる時、ただ獨り醒めて眠らず、夜も尙ほ水は流れて

行く。寂しい、物音のない、眞暗な世界の中で、山を越え、谷を越え、無限の荒寥とした曠野を越えて、水はその旅を續けて行く。ああ、だれがその悲哀を知るか！ 夜ひとり目醒めた人は、眠りのない枕の下に、水の深々といふ響を聴く。

——我が心いたく疲れたり。主よ休息をあたへ給へ！

## 父と子供

あはれな子供が、夢の中ですすり泣いて居た。

「皆が私を苛めるの。白痴だつて言ふの。」

子供は實際に痴呆であり、その上にも母が無かつた。

「泣くな。お前は少しも白痴ぢやない。ただ運の悪い、不幸な氣の毒の子供なのだ。」

「不幸つて何？ お父さん。」

「過失のことを言ふのだ。」

「過失つて何？」

「人間が、考へなしにしたすべてのこと。例へばそら、生れたこと、生きてること、食つてること、結婚したこと、生殖したこと。何もかも、皆過失なのだ。」

「考へてしたら好かつたの？」

「考へてしたつて、やつぱり同じ過失なのさ。」

「ぢやあどうするの？」

「おれには解らん。エス様に聞いてごらん。」

子供は日曜學校へ行き、讚美歌をおぼえてよく歌つてゐた。

「あら？ 車が通るの。お父さん！」

地平線の遠い向うへ、浪のやうな山脈が續いて居た。馬子

に曳かれた一つの車が、遠く悲しく、峠を越えて行くのであつた。子供はそれを追ひ馳けて行つた。そして荷車の後にすがつて、遠く地平線の盡きる向ふへ、山脈を越えて行くのであつた。

「待て！ 何處へ行く。何處へ行く。おおい。」

私は聲の限りに呼び叫んだ。だが子供は、私の方を見向きもせず、見知らぬ馬子と話をしながら、遠く、遠く、漂泊の旅に行く巡禮みたいに、峠を越えて行つてしまつた。

「歯が痛い。痛いよう！」

私が夢から目醒めた時に、側の小さなベットの中で、子供

がうつつのやうに泣き續けて居た。

「歯が痛い。痛いよう！ 痛いよう！ 罪人と人に呼ばれ、

十字架にかかり給へる、救ひ主イエス・キリスト……歯が痛い。痛いよう！」

## 戸

すべての戸は、二重の空間で仕切られてゐる。

戸の内側には子供が居り、戸の外側には宿命が居る。——これがメーテルリンクによつて取り扱はれた、詩劇タンタジールの死の主題であつた。も一つ付け加へて言ふならば、戸の内側には洋燈が灯り、戸の外側には哄笑がある。風がそれを吹きつける時、ばたばたといふ寂しい音で、哄笑が洋燈を吹き消してしまふのである。

## 山上の祈

多くの先天的の詩人や藝術家等は、彼等の宿命づけられた仕事に對して、あの悲痛な耶蘇の祈をよく知つてゐる。「神よ！もし御心に適ふならば、この苦き酒盃を離し給へ。されど爾にして欲するならば、御心のままに爲し給へ。」

## 戦場での幻想

機関銃よりも悲しげに、繫留気球よりも憂鬱に、炸裂弾よりも残忍に、毒瓦斯よりも沈痛に、曳火弾よりも蒼白く、大砲よりもロマンチックに、煙幕よりも寂しげに、銃火の白く閃めくやうな詩が書きたい！

## 蟲

或る詰らない何かの言葉が、時としては毛蟲のやうに、腦裏の中に意地わるくこびりついて、その意味が見出される迄、執念深く苦しめるものである。或る日の午後、私は町を歩きながら、ふと「鐵筋コンクリート」といふ言葉を口に浮べた。何故にそんな言葉が、私の心に浮んだのか、まるで理由がわからなかつた。だがその言葉の意味の中に、何か常識の理解し得ない、或る幽幻な哲理の謎が、神祕に隠されてゐるやうに思はれた。それは夢の中の記憶のやうに、意識の背

後にかくされて居り、漂渺として捉へがたく、そのくせすぐ目の前にも、捉へることが出来るやうに思はれた。何かの忘れたことを思ひ出す時、それがつい近くまで来て居ながら、容易に思ひ出せない時のあの焦燥。多くの人々が、たれも経験するところの、あの苛々した執念の焦燥が、その時以來憑きまといつて、絶えず私を苦しくした。家に居る時も、外に居る時も、不斷に私はそれを考へ、この詰らない、解りきつた言葉の背後にひそんでゐる、或る神秘的なイメーヂの謎を摸索して居た。その憑き物のやうな言葉は、いつも私の耳元で囁いて居た。悪いことにはまた、それには強い韻律的の調子があり、一度おぼえた詩語のやうに、意地わるく忘れることが

できないのだ。「テツ、キン、コン」と、それは三シラブルの押韻をし、最後に長く「ククート」と曳くのであつた。その神秘的な意味を解かうとして、私は偏執狂者のやうになつてしまつた。明らかにそれは、一つの強迫観念にちがひなかつた。私は神経衰弱症にかかつて居たのだ。

或る日、電車の中で、それを考へつめてゐる時、ふと隣席の人の會話を聞いた。

「そりや君。駄目だよ。木造ではね。」

「やつぱり鐵筋コンクリートかな。」

二人づれの洋服紳士は、たしかに何所かの技師であり、建築のことを話して居たのだ。だが私には、その他の會話は聞

えなかつた。ただその單語だけが耳に入つた。「鐵筋コンクリート！」

私は跳びあがるやうなショックを感じた。さうだ。この人たちに聞いてやれ。彼等は何でも知つてるのだ。機會を逸するな。大膽にやれ。と自分の心をはげましながら

「その……ちよいと……失禮ですが……。」

と私は思ひ切つて話しかけた。

「その……鐵筋コンクリート……ですな。エ、……それはですな。それはつまり、どういふわけですか。エ、そのつまり言葉の意味……といふのはその、つまり形而上の意味……。僕はその、哲學のことを言つてるのですが……。」

私は妙に舌がどもつて、自分の意志を表現することが不可能だつた。自分自身には解つて居ながら、人に説明することができないのだつた。隣席の紳士は、吃驚したやうな表情をして、私の顔を正面から見つめて居た。私が何事をしやべつて居るのか、意味が全で解らなかつたのである。それから隣の連を顧み、氣味悪さうに目を見合せ、急にすつかり黙つてしまつた。私はテレかくしにニヤニヤ笑つた。次の停車場についた時、二人の紳士は大急ぎで席を立ち、逃げるやうにして降りて行つた。

到頭或る日、私はたまりかねて友人の所へ出かけて行つた。部屋に入ると同時に、私はいきなり質問した。



「鐵筋コンクリートつて、君、何のことだ。」

友は呆氣にとられながら、私の顔をぼんやり見詰めた。私の顔は岩礁のやうに緊張して居た。

「何だい君。」

と、半ば笑ひながら友が答へた。

「そりや君。中の骨組を鐵筋にして、コンクリート建てにした家のことぢやないか。それが何うしたつてんだ。一體。」

「ちがふ。僕はそれを聞いてるのぢやないんだ。」

と、不平を色に現はして私が言つた。

「その意味なんだ。僕の聞くのはね。つまり、その……。」

その言葉の意味……表象……イメージ……。つまりその、言

語のメタフィザックな暗號。寓意。その秘密……解るね。つまりその、隠されたバズル。本當の意味なのだ。本當の意味なのだ。」

この本當の意味と言ふ語に、私は特に力を入れて、幾度も幾度も繰返した。

友はすっかり呆氣に取られて、放心者のやうに口を開きながら、私の顔ばかり視つめて居た。私はまた繰返して、幾度もしつこく質問した。だが友は何事も答へなかつた。そして故意に話題を轉じ、笑談に紛らさうと努め出した。私はムキになつて腹が立つた。人がこれほど眞面目になつて、熱心に聞いている重大事を、笑談に紛らすとは何の事だ。たしかに、

此奴は自分で知つてゐるにちがひないのだ。ちやんとその秘密を知つてゐながら、私に教へまいとして、わざと薄とぼけて居るにちがひないのだ。否、この友人ばかりではない。いつか電車の中で逢つた男も、私の周圍に居る人たちも、だれも皆知つてゐるのだ。知つて私に意地わるく教へないのだ。

「ざまあ見やがれ。此奴等！」

私は心の中で友を罵り、それから私の知つてゐる範圍の、あらゆる人々に對して敵愾した。何故に人々が、こんなにも意地わるく私にするのか。それが不可解でもあるし、口惜しくもあつた。

だがしかし、私が友の家を飛び出した時、ふいに全く思ひ

がけなく、その憑き物のやうな言葉の意味が、急に明るく、靈感のやうに閃めいた。

「蟲だ！」

私は思はず聲に叫んだ。蟲！ 鐵筋コンクリートといふ言葉が、秘密に表象してゐる謎の意味は、實にその單純なイメージにすぎなかつたのだ。それが何故に蟲であるかは、此所に説明する必要はない。或る人々にとつて、牡蠣の表象が女の肉體であると同じやうに、私自身にすつかり解りきつたことなのである。私は聲をあげて明るく笑つた。それから兩手を高く上げ、鳥の飛ぶやうな形をして、嬉しさうに叫びながら、町の通りを一散に走り出した。

## 虚無の歌

我れは何物をも喪失せず

また一切を失ひ盡せり。

「氷島」

午後の三時。廣漠として廣間の中で、私はひとり麥酒を飲んでた。だれも外に客がなく、物の動く影さへもない。暖爐は明るく燃え、扉の厚い硝子を通して、晩秋の光が佗しく射してた。白いコンクリートの床、所在のない食卓、脚の細い椅子の数々。

エビス橋の側に近く、此所の佗しいビヤホールに来て、私

は何を待つてるのだらう？ 戀人でもなく、熱情でもなく、希望でもなく、好運でもない。私はかつて年が若く、一切のものを欲情した。そして今既に老ひて疲れ、一切のものを喪失した。私は孤獨の椅子を探して、都會の街々を放浪して来た。そして最後に、自分の求めてるものを知った。一杯の冷たい麥酒と、雲を見てゐる自由の時間！ 昔の日から今日の日まで、私の求めたものはそれだけだった。

かつて私は、精神のことを考へてゐた。夢みる一つの意志。モラルの體熱。考へる葦のおののき。無限への思慕。エロスへの切ない祈禱。そして、ああそれが「精神」といふ名で呼ばれた、私の失はれた追憶だった。かつて私は、肉體のこと

を考へて居た。物質と細胞とで組織され、食慾し、生殖し、不斷にその解體を強ゐるところの、無機物に對して抗爭しながら、悲壯に惱んで生き長らへ、貝のやうに呼吸してゐる悲しい物を。肉體！ ああそれも私に遠く、過去の追憶にならうとしてゐる。私は老ひ、肉慾することの熱を無くした。墓と、石と、蟾蜍ひきかへるとが、地下で私を待つてゐるのだ。

ホールの庭には桐の木が生え、落葉が地面に散らばつて居た。その板塀で囲まれた庭の彼方、倉庫の並ぶ空地の前を、黒い人影が通つて行く。空には煤煙が微かに浮び、小供の群集する遠い聲が、夢のやうに聞えて来る。廣いがらんとした廣間ひろまの隅で、小鳥が時々囀つて居た。エビス橋の側に近く、

晩秋の日の午後三時。コンクリートの白つばい床、所在のない食卓たべ卓、脚の細い椅子の數々。

ああ神よ！ もう取返す術たぎもない。私は一切を失ひ盡した。けれどもただ、ああ何といふ楽しさだらう。私はそれを信じたいのだ。私が生き、そして「有る」ことを信じたいのだ。永久に一つの「無」が、自分に有ることを信じたいのだ。神よ！ それを信ぜしめよ。私の空洞くうどうな最後の日に。

今や、かくして私は、過去に何物をも喪失せず、現に何物をも失はなかつた。私は喪心者のやうに空を見ながら、自分の幸福に満足して、今日も昨日も、ひとりで閑雅な麥酒ビールを飲んでる。虚無よ！ 雲よ！ 人生よ。

## 貸家札

熱帯地方の砂漠の中で、一疋の獅子が晝寢をして居た。肢體をできるだけ長く延ばして、さもだるさうに疲れきつて。すべての猛獣の習性として、胃の中の餌物が完全に消化するまで、おそらく彼はそのポーズで永遠に眠りつづけて居るのだらう。赤道直下の白晝。風もなく音もない。萬象の死に絶えた沈黙の時。

その時、不意に獅子が眠から目をさました。そして耳をそ

ば立て、起き上り、緊張した目付をして、用心深く、機敏に襲撃の姿勢をとつた。どこかの遠い地平の影に、彼は餌物を見つけたのだ。空気が動き、萬象の沈黙が破れた。

一人の旅行者——ヘルメット帽を被り、白い洋服をきた人間が、この光景を何所かで見居た。彼は一言の口も利かず、黙つて砂丘の上に生えてる、椰子の木の方へ歩いて行つた。その椰子の木には、すつと前から、長い時間の風雨に曝され、一枚の古い木札が釘づけてあつた。

(貸家アリ。瓦斯、水道付。日當リヨシ。)

ヘルメットを被つた男は、黙つてその木札をはがし。ポケットに入れ、すたすたと歩きながら、地平線の方へ消えてしまつた。

### この手に限るよ

目が醒めてから考へれば、實に馬鹿々々しくつまらぬことが、夢の中では勿體らしく、さも重大の眞理や発見のやうに思はれるのである。私はかつて夢の中で、數人の友だちと一緒に、町の或る小綺麗な喫茶店に入つた。その給仕女に一人の伶俐さうな顔をした、たいさう愛くるしい少女が居た。どうにかして、皆はそのメツチェンと懇意になり、自分に手なづけようと焦燥した。そこで私が、一つのすばらしいこと

を思ひついた。少女の見て居る前で、私は角砂糖の一つを壺から出した。それから充分に落着いて、さも勿體らしく、意味ありげの手付をして、それを紅茶の中へそつと落した。

熱い煮えたつた紅茶の中で、見る見る砂糖は解けて行つた。そして小さな細かい気泡が、茶碗の表面に浮びあがり、やがて周囲の邊に寄り集つた。その時私はまた一つの角砂糖を壺から出した。そして前と同じやうに、氣取つた勿體らしい手付をしながら、そつと茶碗へ落とし込んだ。(その時私は、いかに自分の手際が鮮やかで、巴里の伊達者がやる以上に、スマートで上品な舉動に適つたかを、自分で意識して得意であつた。) 茶碗の底から、再度また気泡が浮び上つた。そして暫らく、

真中にかたまり合つて踊りながら、さつと別れて茶碗の邊に吸ひついて行つた。それは丁度、よく訓練された團體遊戯が、號令によつて、行動するやうに見えた。

「どうだ。すばらしいだらう！」

と私が言つた。

「まあ。素敵ね！」

と、ちつと見て居たその少女が、感嘆おく能はざる調子で言つた。

「これ、本當の藝術だわ。まあ素敵ね。貴方。何て名前の方なの？」

そして私の顔を見詰め、絶対無上の尊敬と愛慕をこめて、

その長い睫毛をしばだいたいた。是非また来てくれと懇望した。私にしばしば逢つて、いろいろ話が聞きたいからとも言つた。私はすっかり得意になつた。そして我ながら自分の思ひ付に感心した。こんなすばらしいことを、何故もつと早く考へつかなかつたらうと不思議に思つた。これさへやれば、どんな女でも造作なく、自分の自由に手なづけることができるのである。かつて何人も知らなかつた、これ程の大發明を、自分が獨創で考へたといふことほど、得意を感じさせることはなかつた。そこで私は、茫然としてゐる友人等の方をふり返つて、さも誇らしく、大得意になつて言つた。

「女の子を手なづけるにはね、君。この手に限るんだよ。こ

の手にね。」

そこで夢から醒めた。そして自分のやつたことの馬鹿々々しさを、あまりの可笑しさに吹き出してしまつた。だが「この手に限るよ。」と言つた自分の言葉が、いつ迄も耳に残つて忘れなかつた。

「この手に限るよ。」

その夢の中の私の言葉が、今でも時々聞える時、私は可笑しさに轉がりながら、自分の中の何所かに住んでる、或る「馬鹿者」の正體を考へるのである。



## 臥床の中で

臥床ふしどの中で、私はひとり目を醒ました。夜明けに遠く、窓の鏡扉の隙間から、あるかなきかの佗しい光が、幽明のやうに影を映して居た。それは夜天の空に輝やいてる、無数の星屑が照らすところの、宇宙の常夜燈の明りであつた。

私は枕許の洋燈を消した。再度また眠らうと思つたのだ。だが醒めた時の瞬間から、意識のぜんまいが動き出した。ああ今日も終日、時計のやうに休息なく、私は考へねばならな

いのだ。そして實に意味のない、愚にもつかないことばかりを、毎日考へねばならないのだ。私はただ眠つて居たい。牡蠣のやうに眠りたいのだ。

黎明の仄かな光が、かすかに部屋を明るくして來た。小鳥の唄が、どこかで早く聞え出した。朝だ。私はもう起きねばならぬ。そして今日もまた昨日のやうに、意味のない生活せいかつの悩みを、とり止めもない記録にとつて、書きつけておかねばならないのだ。そうして！ ああそれが私の「仕事」であらうか。私の果敢ない「人生」だらうか。催眠薬とアルコールが、すべての悩みから解放して、私に一切を忘却させる。夜よとなつたら、私はまた酒場へ行かう。だが酔ふことの快樂で

はなく、一切を忘れることの恩恵を、私は神に祈つて居るのだ。神よ。すべての忘却をめぐみ給へ。

朝が来た。汽笛が聞える。日が登り、夜が来る。そしてまた永遠に空洞の生活が……。ああ止めよ。止めよ。むしろ断乎たる決意を取れ！ 臥床の中で、私はまた呪文のやうに、いつもの習慣となつてる言葉を繰返した。

止めよ。止めよ。断乎たる決意をとれ！

そもそもしかし、何が「断乎たる決意」なのか。私はその言葉の意味することを、自分ではつきりと知りすぎて居る。知つてしかも恐れはばかり、日々にただ咒文の如く、朝の臥

床の中で繰返してゐる。汝、卑怯者！ 愚痴漢！ 何故に屑ぎよくその人生を清算し、汝を處決してしまはないのか。汝は何事をも爲し得ないのだ。そしてただ、汝の信じ得ない神の恩寵が、すべての人間に平等である如く、汝にもその普遍的な最後の恩寵——永遠の忘却——を、いつか與へ給ふ日を、待つて居るのだ。否々。汝はそれさへも恐れ戦のき、葦のやうに震へてゐるのだ。ああ汝、毛蟲にも似たる卑劣漢。

だがしかし、その時朝の佗しい光が、私の臥床の中にさし込み、やさしい揺籠のやうにゆすつてくれた。古い聖書の忘れた言葉が、私の心の或る片隅で、静かに佗しい日陰をつくり、夢の記憶のやうに浮んで来た。

神はその一人子を愛するほどに、汝等をも愛し給ふ。

朝が来た。雀等は窓に鳴いてる。起きよ。起きよ。起きて  
また昨日の如く、汝の今日の生活をせよ――。

### 物みなは歳日と共に亡び行く

わが故郷に歸れる日、ひそかに秘めて歌へるうた。

物みなは歳日と共に亡び行く。

ひとり来てさまよへば

流れも速き廣瀬川。

何にせかれて止むべき

憂ひのみ永く残りて

わが情熱の日も暮れ行けり。

久しぶりで故郷へ歸り、廣瀬川の河畔を逍遙しながら、私はさびしくこの詩を誦した。

物みなは歳日と共に亡び行く——郷土望景詩に歌つたすべての古蹟が、殆んど皆跡方もなく廢滅して、再度また若かつた日の記憶を、郷土に見ることができないので、心寂寞の情にさしぐんだのである。

全く何もかも變つてしまつた。昔ながらに變らぬものは、廣瀬川の白い流れと、利根川の速い川瀬と、昔、國定忠治が立て籠つた、赤城山とがあるばかりだ。

少年の日は物に感ぜしや  
われは波宜亭の二階によりて  
悲しき情感の思ひに沈めり

と歌つた波宜亭も、既に今は跡方もなく、公園の一部になつてしまつた。その公園すらも、昔は赤城牧場の分地であつて、多くの牛が飼はれて居た。

ひとり友の群を離れて、クロバアの茂る校庭に寝轉びながら、青空を行く小鳥の影を眺めつゝ

艶めく情熱に惱みたり

と歌つた中學校も、今では他に移轉して廢校となり、殘骸のやうな姿を曝して居る。私の中學に居た日は悲しかった。落第。忠告。鐵拳制裁。絶えまなき教師の叱責。父母の嗟嘆。そして灼きつくやうな苦しい性慾。手淫。妄想。血塗られた惱みの日課！ 嗚呼しかしその日の記憶も荒廢した。むしろ何物も亡びるが好い。

わが草木くさきとならん日に  
たれかは知らむ敗亡の  
歴史を墓に刻むべき。

われは飢ゑたりとこしへに

過失を人も許せかし。

過失を父も許せかし。

——父の墓に詣でて——

父の墓前に立ちて、私の思ふことはこれよりなかつた。その父の墓も、多くの故郷の人々の遺骸と共に、町裏の狭苦しい寺の庭で、佗しく窮屈げに立ち並んでる。私の生涯は過失であつた。だがその「過失の記憶」さへも、やがて此所にある萬象と共に、虚無の墓の中に消え去るだらう。父よ。わが不幸を許せかし！

たちまち遠景を汽車の走りて  
我れの心境は動騒せり。

と歌つた二子山の附近には、移轉した中學校が新しく建ち、昔の佗しい面影もなく、景象が全く一新した。かつては蒲公英の莖を噛みながら、ひとり物思ひに耽つて徘徊した野川の畔に、今も尙白い葦が咲くだらうか。そして古き日の娘たちが、今でも尙故郷の家に居るだらうか。

われこの新道の交路に立てど

さびしき四方の地平をきはめず。

暗鬱なる日かな

天日家並の軒に低くして

林の雜木まばらに伐られたり。

と歌つた小出の林は、その頃から既に伐採されて、樅や櫟の木が無慘に伐られ、白日の下に生々しい切株を見せて居たが、今では全く開拓されて、市外の遊園地に通ずる自動車の道路となつてゐる。昔は學校を嫌ひ、辨當を持つて家を出ながら、ひそかにこの林に来て、終日鳥の鳴聲を聞きながら、少年の愁ひを悲しんでゐた私であつた。今では自動車が荷物を

載せて、私の過去の記憶の上を、勇ましくタンクのやうに爆進して行く。

兵士の行軍の後に捨てられ  
破れたる軍靴のごとくに

汝は路傍に渴けるかな。

天日てんじつの下に口をあけ

汝の過去を哄笑せよ。

汝の歴史を捨て去れかし。

——昔の小出新道にて——

利根川は昔ながら流れて居るが、雲雀の巢を拾った河原の砂原は、原形もなく變つてしまつて、ただ一面の桑畑になつてしまつた。

此所に長き橋の架したるは

かのさびしき惣社の村より

直として前橋の町に通するらん。

と歌つた大渡新橋も、また近年の水害で流失されてしまつた。たゞ前橋監獄だけが、新たに刑務所と改名して、かつてあつた昔のやうに、長い煉瓦の堀をノスタルヂアに投影しながら、寒い上州の北風に震へて居た。だが

監獄裏の林に入れば  
 囀鳥高きにしば鳴けり

と歌つた裏の林は、概ね皆伐採されて、囀鳥の聲を聞く由もなく、昔作つた詩の情趣を、再度イメーヂすることが出来なくなつた。

物みなは歳日と共に亡び行く――。

ひとり來りてさまよへば

流れも速き廣瀬川

何にせかれて止むべき。

――廣瀬河畔を逍遙しつゝ――

## 抒情詩

神よ、この涙の谷から救ひ出せ。

シヨベンハウエル



漂泊者の歌

日は断崖の上に登り  
憂ひは陸橋の下を低く歩めり。  
無限に遠き空の彼方  
續ける鐵路の柵の背後うしろに  
一つの寂しき影は漂ふ。

ああ汝 漂泊者！

過去より來りて未來を過ぎ  
 久遠くわんの郷愁を追ひ行くもの。  
 いかなれば踏爾として  
 時計の如くに憂ひ歩むぞ。  
 石もて蛇を殺すごとく  
 一つの輪廻を斷絶して  
 意志なき寂寥を踏み切れかし。

ああ 悪魔よりも孤獨にして  
 汝は氷霜の冬に耐へたるかな！  
 かつて何物をも信することなく

汝の信するところに憤怒を知れり。  
 かつて欲情の否定を知らず  
 汝の欲情するものを弾劾せり。  
 いかなればまた愁ひ疲れて  
 やさしく抱かれ接吻する者の家に歸らん。  
 かつて何物をも汝は愛せず  
 何物もまたかつて汝を愛せざるべし。  
 ああ汝 寂寥の人  
 悲しき落日の坂を登りて  
 意志なき斷崖を漂泊たふよひ行けど  
 いづこに家郷はあらざるべし。

汝の家郷は有らざるべし！

## 乃木坂倶楽部

十二月また来れり。

なんぞこの冬の寒きや。

去年はアパートの五階に住み

荒漠たる洋室の中

壁に寝臺を寄せてさびしく眠れり。

わが思惟するものは何ぞや

すでに人生の虚妄に疲れて

今も尙家畜の如くに飢ゑたるかな。  
 我れは何物をも喪失せず  
 また一切を失ひ盡せり。  
 いかなれば追はるる如く  
 歳暮の忙がしき街を愁ひ迷ひて  
 晝もなほ酒場の椅子に酔はむとするぞ。  
 虚空を翔け行く鳥の如く  
 情緒もまた久しき過去に消え去るべし。

十二月また来れり  
 なんぞこの冬の寒きや。

訪ふものは扉を叩つくし  
 われの懶惰らんたを見て憐れみ去れども  
 石炭もなく煖爐もなく  
 白堊の荒漠たる洋室の中  
 我れひとり寢臺べつだいに醒めて  
 白晝ひるもなほ熊の如くに眠れるなり。

## 珈琲店酔月

坂を登らんとして渴きに耐へず  
 踰跲として酔月の扉を開けば  
 狼藉たる店の中より  
 破れしレコードは鳴り響き  
 場末の煤ぼけたる電氣の影に  
 貧しき酒瓶の列を立てたり。  
 ああ この暗愁も久しいかな！

我れまさに年老いて家郷なく  
 妻子離散して孤獨なり。  
 いかんぞまた漂泊の悔を知らむ。  
 女等群がりて卓を圍み  
 我れの醉態を見て憫みしが  
 たちまち罵りて財布を奪ひ  
 残りなく錢を數へて盗み去れり。

## 晩秋

汽車は高架を走り行き  
 思ひは陽ざしの影をさまよふ。  
 静かに心を願みて  
 満たさるなきに驚けり。  
 巷ちまたに秋の夕日散り  
 舗道に車馬は行き交へども  
 わが人生は有りや無しや。

煤煙くもる裏街の  
 貧しき家の窓にさへ  
 斑ひらまき黄葵の花は咲きたり。

——朗吟のために——

## 昨日にまさる戀しさの

昨日にまさる戀しさの  
 湧きくる如く嵩まるを  
 忍びてこらへ何時までか  
 惱みに生くるものならむ。  
 もとより君はかぐはしく  
 阿艶あでに匂へる花なれば  
 わが世に一つ残されし

生死の果の情熱の  
 戀さへそれと知らざらむ。  
 空しく君を望み見て  
 百ひやくたび胸を焦すより  
 死なば死ねかし感情の  
 かくも苦しき日の暮れを  
 鐵路の道に迷ひ來て  
 破れむまでに嘆くかな  
 破れむまでに嘆くかな。

——朗吟のために——

## 歸郷

昭和四年の冬、妻と離別し、二児を抱へて故郷に歸る。

わが故郷に歸れる日

汽車は烈風の中を突き行けり。

ひとり車窓に目醒むれば

汽笛は闇に吠え叫び

火焰は平野を明るくせり。

まだ上州の山は見えずや。

夜汽車の仄暗き車燈の影に

母なき子供等は眠り泣き

ひそかに皆わが憂愁を探れるなり。

嗚呼また都を逃れ來て

何所の家郷に行かむとするぞ。

過去は寂寥の谷に連なり

未來は絶望の岸に向へり。

砂礫のごとき人生かな！

われ既に勇氣おとろへ

暗憊として長へに生きるに倦みたり。

いかんぞ故郷に獨り歸り

さびしくまた利根川の岸に立たんや。



汽車は曠野を走り行き  
 自然の荒寥たる意志の彼岸に  
 人の憤怒を烈しくせり。

## 虚無の鴉

我れはもと虚無の鴉  
 かの高き冬至の屋根に口をあけて  
 風見の如くに咆號せん。  
 季節に認識ありやなしや  
 我れの持たざるものは一切なり。

## 品川沖觀艦式

低き灰色の空の下に  
 軍艦の列は横はれり。  
 暗憐として錨をおろし  
 みな重砲の城の如く  
 無言に沈鬱して見ゆるかな。  
 曇天暗く  
 埠頭に觀衆の群も散りたり、

しだいに暮れゆく海波の上  
 既に分列の任務を終へて  
 艦等みな歸港の情に渴けるなり。  
 冬の日沖に荒れむとして  
 浪は舷側に凍り泣き  
 錆は鐵板に食ひつけども  
 軍艦の列は動かんとせず  
 蒼茫たる海洋の上  
 彼等の叫び、渴き、熱意するものを強く持せり。

## 火

赤く燃える火を見たり。

獸類けものの如く

汝は沈黙して言はざるかな。

夕べの静かなる都會の空に

火焰はのほは美しく燃え出づる

たちまち流れはひろがり行き

瞬間に一切を亡ぼし盡せり。

資産も、工場も、大建築も

希望も、榮譽も、富貴も、野心も

すべての一切を焼き盡せり。

火よ

いかなれば獸類けものの如く

汝は沈黙して言はざるかな。

さびしき憂愁に閉されつつ

かくも静かなる薄暮の空に

汝は熱情を思ひ盡せり。

地下鐵道にて

ひとり來りて地下鐵道の  
 青き歩廊をさまよひつ  
 君待ちかねて悲しめど  
 君が夢には無きものを  
 なに幻影の後尾燈  
 空洞に暗きトンネルの

壁に映りて消え行けり。  
 壁に映りて過ぎ行けり。

「なに幻影の後尾燈」「なに幻影の戀人を」に通ず。掛ヶ岡。